

どうして、こんなことになつてているのだろうか。

最初の挨拶を思い出す。

今期からこちらの部署でお世話になります、事務の白瀬です、と挨拶をしたときだつた。イヤフォンを外し、表情ひとつ変えずにこちらを見た黒崎先輩は、形式張った「黒崎です、よろしくお願ひします」のあと、まるで興味なさそうな……むしろ煙たがるようなトンでこう言つた。

「……形に残らないのが嫌なので、用件があれば社内チャットでどうぞ。雑談ならご自由に……俺以外の、他の人と」

それが、今はどうして――

「白瀬さん、やつぱりまだ残つてた。はいこれ、ミルクティー好きだよね」

「黒崎先輩！？ うわあ、好きです、ありがとうございます……わっ？」

「白瀬さんさ、いつもそのデータ入力する時に残業してゐるよね。なんかマクロ組めないか

な……ちょっと見せて」

こんなにも、話しかけられるようになつたのだろうか。

高い背を屈ませて画面を見つめる黒崎先輩にドキッとする。

あんなことを言つていた黒崎先輩だったというのに、今はこんな感じだ。残業しているときや、一人でいるとき、何かと理由をつけて話しかけられるようになつた。

しかもその時の顔がやたら近い。端正というよりほかない顔面がわたしのすぐ隣に寄り添つてくる。

(本当に、どうして……ていうか、他の人、もういないよね……?)

こんなことがバレやしないだろうかと、ドキドキよりもヒヤヒヤが勝る。

涼しげな顔立ちで女性社員人気ダントツトップを誇りながら、コミュニケーション嫌いで誰とも馴れ合わないと有名な――

そんな黒崎先輩から、直々に話しかけられている、なんて。

誰もいない社内で

アカウリ 煽られ 本気イキ。

なぜかわたしにだけちょっとかいをかけてくる

タールで孤高な

ハイスペ先輩から

ろこもこうさぎ

絢辻
透

甘々
じれる溺愛
ラッシュ

が止まらなくなっちゃった話

「ふう……」

ヒヤヒヤはしたけれど本当にありがたかつたな、なんて先週のことを思い出す。

黒崎 韶（くろさき ひびき）先輩は、外資系企業から引き抜きの優秀なシステムエンジニアだ。

あのとき黒崎先輩に組んでもらったマクロというもので、今週から作業がすっかり楽になつた。

ようやく毎週のような残業から解放されそうなので、今日は少し余裕ぶつて、給湯室でミルクティーを淹れて優雅な休憩タイムと洒落込んでいたのだが――

「あ。やつぱり、白瀬さん居た」

「黒崎先輩……!? お、お疲れ様です」

入口から黒崎先輩が顔を覗かせた。

先輩も休憩だろうか。高い背を屈ませて入つてくる先輩に思わずぱちりと瞬きをする。

「あ、まだポットにお湯残つてますんで、よければ……」

「お湯は平気、俺が用あんの白瀬さんだから」

「えつ、わたしですか？」

「うん、中々チャンスなくて、休憩中にごめん。この間のマクロどうだつたかなーって」

——やつぱり。

薄々は感じていたことだけれど、黒崎先輩は話しかけるとき、あえてわたしが一人のときを選んでいるようだった。

正直言つてその配慮はありがたい。話している現場を他の人に見られたら、黒崎先輩をほとんど神聖化している女性社員たちや、お喋りな男性社員たちに何を言われるかわからぬから。

「すごく楽になりました！ 今週から残業しなくてすみそうです。ありがとうございます、
黒崎先輩」

「本当？ なら良いんだけど、使いづらいなーってトコ、ない？」

「いえ、とつ、特には……つ」

思わず声が裏返る。

こちらを覗いてくる顔が近かつたからだ。切れ長の目に少しかかるくらいの、傷ひとつないさらさらの黒髪があまりに綺麗で緊張してしまう。

瞳も髪の毛も、光を反射しているところだけ紫がかつて見えて、宝石みたい——なんて場違いに思っていたら、ふとその視線がわたしの顔より下へと落ちた。

「……うさぎだ」

「えっ？ あっ、これですか」

独り言のような呟きに心当たりがあり、同じように視線を下げた。

わたしが持っているミルクティーの入ったマグカップには、フチに小さなうさぎが引っかかっているようなデザインが施してある。

雑貨屋で一目惚れして購入して、たまの休憩の時にだけ使うようになっているものだ。

「へへ……ちょっと洗いにくいんですけどね、可愛くて買っちゃいました」「ふーん……」

カップを少し持ち上げてみせると、いつも流れるようにタイピングをする細くて長い指が伸びてきて、ぶら下がるうさぎの耳をそつと撫でた。

少し意外だ。こういうの、黒崎先輩は好きじやなさそうなのに——なんて思っていたら、突然目が合った。

「……可愛いね」「へあつ！？」

思わず一言に心臓が跳ねた。

変な声と一緒にびくっと肩が揺れてしまつて、手にミルクティーが飛び散る。淹れたてではないので熱くはないが、ベタベタになつてしまつた。

「ごめん。そんな驚くと思わなかつた」

「だ、大丈夫ですっ、わたしこそ変な反応してすみません……っ」

目を見開いた黒崎先輩がポケットから小さなウェットティッシュを出しててくれる。恥ずかしい。うさぎに可愛いと言っているだけだろうに、勘違いしたみたいな反応をしてしまった上、こんな醜態を晒すなんて。

慌ててカップを置いて手を洗おうとしたら、なぜか手を取られてしまった。

「あー……やっぱベタベタになつてる」

「そそそそんな、黒崎先輩、自分で拭けますから……っ！」

「俺の所為だし。てか白瀬さん、手えちつちや……」

独り言のような呟きに思わず頬へと熱がこもっていく。ろくな抵抗もできないまま、細くてきれいな手に包まれながら、ウェットティッシュでやさしく拭われてしまった。心音が鳴り止まない。こんな恥ずかしいし緊張するし、何よりやっぱり。

(だつ、誰かに見られたらヤバい……！)

あの黒崎先輩にこんなことをさせているなんて。

丁寧に指の間までも拭かれて、いたたまれなさに唇をぎゅっと噛みしめる。

「……ん。よし、綺麗になつた」

「ううつ、あ、ありがとうございます、……つ！？」

ようやく解放され、ほつとしたタイミングで顔を上げると、給湯室のドアの向こうから「お疲れ〜」と聞き覚えのある声が聞こえて思わず息を詰めた。

電話中だろう。あの声は、わたしが元々配属されていた営業部の森下先輩だ。

仕事は出来るし、そこそこ格好いいけれどお喋りで、良くも悪くも悪目立ちすることでの有名な。

「くくく、黒崎先輩つ、わたし時間なので、戻ります……！」

「え、もう？」

「すみません、お疲れ様です……今度、マクロのお礼させてください……！」

変なタイミングで切り上げている自信はあるが、森下先輩に喋っているところを気づかれでもしたらかなわない。

わたしは深々とお辞儀をすると、マグカップを握りしめたまま給湯室から退散した。

幸いなことに、通りすがる森下先輩はやはり電話中だったようだ。笑顔で手を振られただけで、給湯室に黒崎先輩がいたことは気付かれなかつたようだつた。

（はあ、良かつた……）

ほつとしながら席に戻る。

本当に、どうしてこんなことになつたのだろうか。

心当たりはあると言えばあるのだが、今思い出しても、こんな風に目をかけてもらうようになるほどのことではなかつたような気がする。

黒崎先輩がわたしに声をかけてくれるようになつた、最初のきっかけは――……

「黒崎先輩、白瀬です。突然申し訳ありません。社内アプリについてお聞きしたいことが

ありまして、メッセージいたしました”

“何ですか”

社内システムのアプリの表示がわたしのPCだけおかしくなつてしまふのを他の先輩に聞いても解決できずに、黒崎先輩に聞くように言われたときだつた。

(噂通りの即既読爆速レスだ……)

送つてから五秒くらいしか経つていないので返事が来た。

仕事に関するチャットだと異様に返事が早いと聞いたことがあつたけれど、本当だつたらしい。わたしは五分くらい悩んでようやく当たり障りのないメッセージを送つただけだというのに。

そこから、わたしのPCでは社内システムの表示がおかしくなつてしまふことを相談すると……気だるげな様子で、黒崎先輩が席まで来てくれたのだ。

「どれ。見せて」

「あ、ありがとうございます。あの、このページがどうしても表示されなくて。ファイアウォールの設定変えてみたり、再起動は試してみたんですけど、やっぱり開くとサーバーと接続が切れちゃうみたいで……」

「ふーん……なるほどね。ていうか、白瀬さん」

「はい？」

「なんでW A S Dの位置に指置いてんの」

「はっ……」

ふつと笑われて慌てて手を引っ込める。

今やっているF P Sゲームの癖で位置が固定されてしまっていた。
恥ずかしさにカッと顔が熱くなる。

「すすすすみません、今やってるゲームの癖が……っ」

「そんなことある？　てかゲームとかやるんだ、白瀬さん……どんなのやってんの」

「銳意練習中でして……あ、えっとV A L O Xっていうゲームを」

「ああ。俺もやつてる」

ちょうどその頃は、友達に誘われて始めた、初めてのFPSゲームを必死に練習しているときだったのだ。

黒崎先輩はそのままわたしとゲームについてのちょっとした雑談をしながらPCを操作していたかと思えば、あっさりとシステムの表示を直してくれた。ついでにわたしがエイム……照準合わせが難しくて困っていることを聞くと、エイム練習ができるブラウザページまで教えてくれた。

「始める前とか、ランクマ潜る前とか……こういうの、やると違うかもね」「うわあ、こんなのあるんですね？ やつてみます、ありがとうございます！」

「どういたしまして。ふ……表示直すのよりありがたがってるじやん」

「あついえ、表示もすごく助かつたんですけども……！」

くすぐすと笑われながらも、教えられたエイム練習のサイトをメモして……そこから数週間後、チャットで業務連絡がてら、報告してみた。

面倒だと思われるかもしれないし、無視されるかもしれないけれど、一応お礼を言いた

かつたのだ。

「連絡は以上です。それとVALOX、先輩の教えてくれたサイトのおかげで無事にランク上がれました。ありがとうございました』
『了解しました。ランク上がれたのは白瀬さんの力』

業務連絡の最後に付け加えられた一言を見て、一人でふふっと笑つて。

——そこから、こんなに話しかけられるようになつたのだった。

(思い返しても、そんなに大したことじやないような気がするんだけど……ゲームやつてるのが珍しかつたのかなあ……)

不思議に思いながら席に戻り、ミルクティーを飲みながら社内カレンダーを開く。

そういえば今週末、飲み会があるんだつた。

ちよつと面倒だなあと思いつつ、今回は懇親会で参加費無料だからね！ という部長の言葉にまんまと乗せられ参加のチェックをつけてしまつた。

まあタダでご飯食べられるならいいか、なんて思いながら参加リストを見る。

(懇親会だからかな、人数多い……。森下先輩はもちろん参加だ。黒崎先輩はもちろん不参加……え？ あれ、嘘……参加のチェック、ついてる)

驚きに目を見張る。

今まで一度も、黒崎先輩がこういう飲み会に参加したことなんかないはずだった。
なるほど、参加人数が多いのはこういう訳か……と納得する。

とはいっても大勢の人前で黒崎先輩が話しかけてくることはないだろう。たぶんずっと女性社員にチヤホヤされていて、わたしと話す隙なんかないはずだ。

そう思つて一人頷くと、肃々と入力の作業に戻った。



「白瀬さん、白瀬さん。こっち、凭れて
「うあ……はい……ありがとうございます……」

……あれ?

わたし、どうしていたんだっけ。

たしか今日は……参加費無料の飲み会に行つて、居酒屋で楽しく飲んだり食べたりして
いたはずだ。それなのに、どうして黒崎先輩の肩に凭れながら、ソファに座つて――

「? あ、え????? どうして……わたし……」

「あ。ちょっと覚醒した? 白瀬さん、かなり酔つて危なかつたから。駅まで送るつて
言つて抜け出してきたんだけど、覚えてない?」

「……!? う、うそ、すみません……えつ……?」

まさか寝てしまうなんて。

というか、黒崎先輩に送つてもらつてしまふなんて。

二重の驚きに飛び起きかけてわたしの顔を覗き込まれて身体が固まる。そういうえば森下

先輩に勧められるまま、カクテルを何杯も飲んでしまったような。
それを、黒崎先輩が助けてくれたような……。

“白ちゃん、次このカクテルいつとく？ ほら、期間限定で美味しいらしいよ”
“ん……あ、はい、じやあ……”
“いい加減にして下さい、森下さん。白瀬さんもうボーッとしてるじゃないですか、アルハ
ラですよ”

「お、思い出してきました……助けてくれて、ありがとうございます」

「ううん。ほんやりしてて心配だつたから……駅より会社のほうが近かつたし、休憩室なら
休めるかと思って。水飲めそうなら、飲んで」
「お水まで……ありがとうございます」

もらつたペットボトルのお水を飲みながらピントの合わない視界で見回す。

比較的新しい設備の揃つた我が社には、休憩室に仮眠ができるソファが置かれている。わ
たしたちが座っているのはそのソファのようだ。

近いとはいえ、わざわざ会社まで戻つてもらうなんて申し訳ないことをしたな……と考えたところでふと、黒崎先輩と、まるで恋人同士みたいな距離感であることに気がついた。

「あつ、ごめん。ごめんなさい、わたし平気なのでつ……すぐ帰りま、ひやつ」

「駄目。ふらついてるじやん」

「あ、わ、わ……つ！？」

慌てて立ち上がりうとしてふらつく身体を押し戻されてしまった。

そのままわたしの正面に向き直った黒崎先輩が顔を寄せてくる。迫りくる顔に思わずきゅっと目を瞑ると、こつん、と額を合わせられた。

状況に頭がついていかない。間近に迫る端正な顔が少し火照っていて、もしかしたら先輩も酔っているのだろうか……？ なんて思う。

「うわ、あつ……。白瀬さん、もう飲み会参加すんのやめれば。森下さん、絶対白瀬さん飲ませてお持ち帰りする気だつたでしょ」

「そつ、そんつ、なことは……つていうか、あの黒崎先輩、ちょっとあの、ち、近いんです

が……！」

「……やだ？」

「嫌というか……恥ずかしいので、うひやつ！？」

黒崎先輩は体勢をえてくれないどころか、両腕をわたしの横の壁についてくる。まるで腕の中に閉じ込められてしまったようで心臓が鳴り止まない。そのままうなじへと鼻先を寄せられて、すん、と首筋の匂いを嗅いできて、またぶわりと身体が熱くなつた。

「俺といひより、森下さんにお持ち帰りされたほうがよかつた？」

「へつ！？　いや、そんなことは全く、ありがたかったです……でも、な、なんでこんな……つひや、」

「……俺、結構モーションかけてたつもりだけど。気付いてなかつたんだ、白瀬さん」

そつと手を掬われる。

伏せた目と共に、やっぱり手ちつちやいね、と囁かれて喉がきゅつと締まつた。わたしより少し体温の低い、骨ばった手に包むように握られて唇を寄せられて、いよい

よ現実が受け止めきれなくなつてくる。

「そつそんな、だつてわたしより、もつと可愛い、ひとは……つ
「……ふーん。そういうこと言つちやうんだ、白瀬さん」

少し不満げに眉が潜められた。混乱する頭に染み渡るような、いつもよりも低い声を出されて、そのまま、ちゅ——と。

耳元に唇が寄せられて、びくりと肩が震える。

「言つとくけど、こないだ可愛いって言つたの……うさぎに、じゃないから。うさぎのマグカップ大切に持つてる白瀬さんが可愛いって事ね。わかんないなら、わかるまで言うから、覚悟して」

「う、うそ……ひやつ♡ ま、つて……あつやだ、耳……」

「耳弱いの？ さつきから俺がちょっと喋る度ビクビクして、かわいい……」

これはもう夢なのではないだろうか。

そう思うのに、熱い息が首筋にかかる感触はどうにもリアルだ。細く骨ばった手がいつの間にか頬を撫でて、わたしの顔を柔らかく持ち上げた。

「く――くろさき、せんぱ……つ」

「ごめん。嫌なら振り払って。俺からは、ちょっと逃がしてあげらんない」

「そんな、できな……つん、うう……つ！？」

ちゅう……つ

柔らかい唇がわたしの唇と重なった。

薄らと目を開いたままの黒崎先輩が、驚くわたしを見て目元を緩ませる。その瞬間に身体の力が抜けてしまった。

全身が火照るように熱っぽいのがお酒のせいなのか黒崎先輩のせいなのか、わからない。

(うそ、どうしよう……黒崎先輩にキスされちゃった……なんか、ゆるゆる唇擦られて……甘つたるいキス、されて……♡ どうしよ、どんどん力抜けて……頭、ふわふわしてきちゃう……♡)

「……キスだけでそんな顔すんの？ 駄目だよ、そんなの。やめてほしいなら、逆効果だよ……？」

「ふあ、あ……あつ？ うそ、まつて、あ……せんぱい、だめ、脱がしちゃ……つ♡」

ぶちっと小さく、シャツのボタンが外される音が聞こえた。

どこまでも器用な細い指があつという間に服の中に滑り込んでいく。汗ばんでいて恥ずかしい、と思う間もなく、ぱちんっ♡ とブラジャーが外されてしまった。

「あー……肌すべすべで気持ちいい……。もじもじ身体揺らしてんの、やだつてこと？ 可愛いだけなんだけど」

「うう……やだと言うか、あ、汗かいてて、きたないので、つや♡ んん、もむの、だめつ、うう……つ♡」

力の入らない身体で必死に身じろいでいたら、むにゅつ♡ とおっぱいを揉みしだかれてしまつた。

柔らかな手つきにぞくぞくと背筋がわななく。ただ揉まれているだけなのにどうしてこんなに反応してしまうのだろう。

さつきキスされてから、身体がおかしい。

「汚くないよ、もちもちでふわふわで、ずっと触つてなくなる……。汗なの？ これ。なんかすごいあまーい匂いするね……」

「つひ……♡ わ、わたし……香水とかは、なにも、あうッ！？♡」

カリ……♡

切り揃えられた爪先が柔らかくわたしの乳首を引っ搔いた。

慌てて声を抑えようとしたけれど近付く黒崎先輩の顔で阻まれてしまう。嬉しそうに目を細めてまたキスをされた。

「めっちゃ可愛い声出すじゃん……ここ好き？ ていうかキスも好きでしょ、さつきからどんどん顔とろけてきてる……いっぱいしよつか、キス」

ちゅ♡ ちゅうつ♡
カリカリカリ……♡

甘つたるい触れるだけのキスと共に、擦るように胸のさきっぱをいじられて頭がふわふわとする。忍び寄る快感にどんどん力が抜けて、求めるように顔を上げてしまう。

「は……ふあ、ん……♡ ううつ、だ、め……♡」

「とろつとろのあまーい声かわい……。白瀬さんつてもしかして、結構えっちなこと好き……？」

「そつ、そんな、こと……うあ、あつ♡ だめ、ちくび、いじっちや……やああ……つ♡♡」

すりすり♡ くにつ♡

こすこすこす♡

熱っぽい囁き声と共に、むく……♡ と勃ち上がった乳首を指先で擦られてお腹に疼きがたまっていく。

否定も抵抗もろくに出来ないままシャツを肩から落とされて、腕に引っかかっているだけだったブラジャーも取られてしまった。

(こ、こんな……♥ 駄目なのに……会社でえっちなこと、されて♥ わたし、興奮しちゃつてる♥ 抵抗しなきやいけないのに、キスされながら乳首カリカリされて……力入んない……あ♥ だめ♥ つまんだ先っぽ、こすこすするの、きもちよくて、だめ……つ♥♥)

「すぐ、むくむく勃起してきてる……白瀬さん、会社で俺に乳首いじられて気持ち良くなつてるんだ……？」

ちゅ
♥
れろ
⋮
⋮
♥

カリカリカリ
♥

柔らかく押し付けられた唇から熱い舌が覗いて唇の隙間をなぞる。その間も乳首をカリカリ♡ する指は止めてもらえない。

襲う刺激に耐えかねてわずかに開いてしまつた唇を割り開かれて、舌先を絡め取られて、

しまった。

「ふあ♡ んう……♡ ら、め……あ、ふ……ツ♡ つうう、だめ、きす……♡♡」
「んー……？ うん、キス駄目だよね……ちょっと深いのしただけで、俺にしがみついて腰
ゆらゆら～～♡ ってしちゃうもんね……」

縋るように伸ばした腕は、気がつけば黒崎先輩の首へと回っていた。

酸素が足りなくて頭がぼんやりする。舌を絡ませられて、乳首を優しく引っかかれているだけなのに、腰が揺らめいてしまうのを止められない。

「あ、や、ちが、つあう！？♡ ま、つて……足やだ、ひらいちや、……つ♡」

「やだじやないでしょ、腰揺れてたよ？ 俺の腰におまたスリスリしようとしてたくせに……
ああ、スリスリできなくなつちやつたから嫌なの……？」

唇を離された途端、ぐ……つ♡ と力を込められて、足を開かされてしまった。
会社用のタイトなスカートを捲られる。中を見られた途端、ク、と喉奥で笑われた。

恥ずかしさに腰が引ける。

「あー、すつご……♥ パンツに染みて糸引いちやつてんじやん、エロすぎ……」「や、やつ……みないで、おねが……つひいんツ♥ あ、あつ！？♥ だめそれ、せんば、あッ、やああ……つ♥♥」

ぬちゅつ♥ ぬりゅ♥

カリカリカリ♥♥

わたしが溢れさせてしまった愛液をまとった先輩の指が、数度パンツのクロツチ越しにおまんこの筋をなぞったかと思えば、すぐにクリトリスへと辿り着いた。膨らんだそこを可愛がるように優しく引っかかれて腰が浮く。

(あ♥ あ♥ だめ、これ、だめ♥ い、いつも自分でするときより……弱あく擦られちゃうの、だめ、きもちいいよお♥ うう……こんな腰浮かせてたら、欲しがってるのバレバレなのに、あ♥ 裏筋こすこすだめ、きもち、い……つ♥)

「……白瀬さん、めっちゃクリでかくない？ パンツの上からでもわかるくらいなんだけ
ど……手はあんなにちっちゃいのに、クリはおつきいんだね……」

「ツ！？ ち、ちが、おつぎくない、うあ♡ あつ♡ やつ、裏筋やらつあああつ♡♡」「
「おつきくないクリだつたら、裏筋こんな簡単にすりすりできないって。もしかしてココ、
毎日自分でいじってる……？」

カリカリ♡ こすこす♡

こりゅこりゅこりゅこりゅ♡♡

絶え間なくぬるついた指に裏筋をなぞられて、バカになりそくなくらい気持ちいい。浮
いていた腰が勝手にへこつ♡ へこつ♡ と揺れてアピールするのが止められない。
焼ききれそうな理性の中で必死に首を振る。

「アツ♡ あつ♡ やらあ、ううつ、いじ、つて、だやいい……つ♡♡」

「嘘だーめ。いじつてなかつたらこんなでつかんないでしょ……ほら、正直に言わない
とカリカリやめちやうよ？ こうやつてクリに指添えるだけにしちゃうけど、いいの……？」

優しくカリカリ♥ して いた指が急にぴと♥ と添えられるだけになつて、甘い刺激が止んだ。

焦れつたさに無意識のまま腰がかくかく揺れる。こんな恥ずかしいはずなのに、物足りなさが勝つてねだるよう に視線を合わせてしまつた。

「あうつ……／＼うう、やら……それ、つゆび、やらあ……♥」

「ふ……やだよね、早くいじつてほしいね。じゃあ俺にちゃんと教えて？ 普段から自分で、クリいじつてるんだよね？」

「ううう……っ」

（恥ずかしい♥ 恥ずかしい、けど♥ ひとつて指くつついてるだけなのやだ♥ 腰かくかくしても焦れつたいだけで足りないよお♥ はやく、はやくいじつてほしい♥ もつとカリカリ、して欲しい……♥）

見下ろす視線にきゅう、と喉が詰まる。

わたしは恥ずかしさに全身を震わせながら、小さく小さく、こくりと頷いた。

「はー……、かつわ……。教えてくれてありがと、いいよ、いっぱいいいじつてあげる」「あ、ん、ん、うあツ♡ あつ♡ うううつ、せんば、それ……きもち、い……♡♡」「ん、いい子、俺の手でクリいじられんの、きもちいい、きもちいいね……」

カリッ♡ カリカリ♡
ぬりゅぬりゅぬりゅ♡

甘やかすような声音と共に腰が痺れるほどの快感が襲つてきて目の前が瞬く。

またクリトリスをいじつてもらえたのが嬉しくて抱きつくと、褒めるように爪先で先っぽをなでなで♡ してくれて、犬のような荒い息が出てしまった。

「は、はつ、はひつ♡ あつ！？♡ んああつ♡ らめ、それ、つよい……あ♡ あ、つ
うあ♡」

「びんびん弾かれるのも嫌いじやなさそ……うわすつご、腰へコもマン汁も止まんないじやん。白瀬さん、こんなエッチな子だつたんだ……」「うう、ン♡ ちがつ、ちがう、のに、つあ♡ あ、あううつ♡」

「ふ……ごめんごめん、大丈夫。エッチで可愛いよ、って意味だから、ね？ 白瀬さんのおっかなどこ、俺にもっと見せて……？」

ぴん♡ ぴん♡ なでなでなで♡

からかうように爪先で弾かれたかと思えば、ビクつくクリトリスをいい子いい子つてするみたいに撫でられて、緩急のある刺激に目の前がちかちかとする。

じわじわと迫る絶頂感におまんこがきゅうん♡ と戦慄いてしまった。
震える指先に力を込めて黒崎先輩のスーツをぎゅっと掴む。

「つは、あ、あつ♡♡ らめ、せんば……つもおだめ、わたひ、だめ、だから♡♡」「駄目？ ああ……いきそう？ 白瀬さん、パンツの上からクリちよつと撫でられたくらいでイキそうなんだ……」

こすこすこす♡ と擦る指は止まってくれない。わたしの腰のカクつきに合わせるように指を添わせて甘い快感を送り込まれ続ける。

ぼやけていく視界にどこか意地悪げに口を開いた先輩の顔が映った。

「……よつわ♡」

「ひいん……つ！？♡ ああやだ、まつでえ、あつ！？♡ らめ、いく、イツぢやうう、あ
ああ、／＼／＼つつ♡♡」

耳元に吹き込まれた言葉を認識した途端、びくびくびく……つ♡ と背中が弓形に反る。甘い刺激が全身を駆け巡って止まらない。ぴく、ぴくつ♡ と揺れるクリトリスをやさしく抑えつけられて、それが気持ち良くてまた快感が長引く。

(はあ……はふ……♡ きもちよすぎて、イッちゃった……♡ うう、いじわるなこと言わ
れながらイッちゃったの恥ずかしすぎる……、……あれ？ なんで、黒崎先輩……わたし
の、お、おまんこの前に、膝、ついて……？)

「イッちゃったね、白瀬さん。俺にクリ撫でられて……煽られながら、イッちゃったんだ……
「は、ふあ……？♡ あ、えつ？ なに、先輩……ま、まつて……？」
「ごめん、あんなエロいイキ方されて待つの普通に無理」

問答無用で濡れてしまつたパンツを脱がされる。恥ずかしくて必死に足を閉じていると、膝小僧にちゅつ♡と唇を寄せられてくすぐったさに足先が震えた。

「足開いて？ イつたばつかの生まんこ、俺に見せて」

「つつ！？ やつ、むり、そんな……恥ずかしいので、ひやうつ！？」

「あー、恥ずかしがつてるトコ無理やり開かされる方が興奮する……？」

何度も口付けられて震える太ももを、ぐ……つ♡と押されて開かされる。そのまま引き寄せられてソファに預けた身体がずり下がり、まるでおまんこを差し出すような体勢になってしまった。

目の前に座つた黒崎先輩は、うつとりとしたようにわたしのおまんこを見つめている。

「あー、すつご……てらてらで、ぷりぷりして……美味そ……♡」

「つあ、うそ、先輩……ほんとに、まつて、だめつ、そんなとこ、つああが……つつ♡♡」

れろ……つ
♡

ちゅ
ちゅうつ
れろ〜〜つ

籠もる。熱い舌がクリトリスに当たつて、いつたばかりの敏感なおまんこにひくんっ♥と力が

強すぎる刺激に逃げたくなるけれど太ももをがつしりと抑えられてしまつてどうすることもできない。

「やあ、あ、あつま、つて、くろさき、せんば……わたひ イつたばかり、だか
らあ……」

ぬろ♥

ちろちろちろ……
♥

舐める勢いを弱められて余計に腰が浮く。
欲しがるようになかなかかく
と小刻

みに揺れてしまうのがたまらなく恥ずかしい。

(ちがう♡　ちがうのに♡　弱くしてほしいとか、そういうことじゃないのに……うう♡
弱いの余計キちやう♡　イつたばかりの敏感クリ、甘やかすみたいにゆる~く吸うの、ダメ……つ♡♡)

「ほんとだ、めっちゃ敏感だね。吸うたびマン汁とろとろ出てきてる……口ではだめだめ言
いながら、まんこで誘ってくるの、上手じやん……♡」
「くうう、やつ♡　かつ、かつてに、でちや……つひ、んんくうつ♡♡」

れろれろ♡

ちゅぱ♡　ちゅぱちゅぱつ♡

勃起してしまっているクリトリスをフェラされるみたいに吸われて脳天から突き抜ける
ような気持ちよさが襲う。

そんなに吸つたらまた大きくなってしまうのにと、力の入らない腕でくしやりと黒崎先
輩の綺麗な黒髪を掴んだ。

「ん……なに、どつち？ それ。全然力入つてないから、やめてほしいのかもつとしてほし
いのか、わかんないんだけど……」

「んひいつ♡ ううつ、やつ♡ やめてえ、先輩……く、くりつ、また、おつきくなつひや
う、からあ……つ」

「いいじやん、おつきくしようよ。大丈夫だよ、白瀬さんが今以上のデカクリになつても、
ちよつと擦れただけで発情しちやうようになつても、俺が責任持つて毎日シコシコしてあ
げるから……♡」

そんなの絶対だめなのに、つて思うのに、甘やかすみたいにまたれろお……つ♡ と舐
め上げられて足先まで力が入つていく。

気持ちいいのが止まらなくて、結局黒崎先輩の頭をただ持つて自分のおまんこに押し付
けるみたいになつてしまつて恥ずかしい。恥ずかしい、のに。

(ダメなのに♡ これ以上おつきくなつたら絶対ダメなのに♡ シコシコされるの想像して
ぞくぞくしちゃうつ♡ きもちいいのとまんない♡ あ、あ、それすき、ちゅつて吸われな

がら先っぽちろちろ舐められるの好き♡ やばい、犬みたいな息、止まんない……つ♡(♡)

「はつ、あつ、あああつ♡ センぱ……ほんと、にい……こんな、あうつう、う♡ らめ……つも、くせに、なっちやうからあ……♡」

「ふ……想像したんだ、白瀬さん。俺に毎日デカクリシコられていくの想像して、癖になつちやう♡ つて思つたんだ？ あー、ほんと、かわいい……」

ちゅつ♡ ちゅううつ♡

れろれろれろれろ……♡♡

硬く大きく育つてしまつたクリトリスを飴玉みたいに舐められて全身に力がこもる。こんなあつさりまたイきたくない♡ と思うのに、身体はどんどん絶頂の準備を初めてしまう。

「ふう♡ ふう♡ うう……せんば、つも、もおつ♡ はなひて、また、きちゃうから、いつちゃうからッ♡」

「んー……なに、もうイきそうなの。早くない？ もうちよつと我慢してよ、俺まだ、白瀬さんのまんこ舐めてたいから……」

「やつづ♥　だめ、もお、なめるの、つうあ！？　あつ♥　やつ♥　ひつぱつちや、ダメえ、ああ～～つつ♥♥」

ぐいい……つ♥　とおまんこの肉を引っ張られて、より露出するクリトリスを裏筋の根本から撫でられる。ただでさえイきそうだったのに、そんなことされて我慢できるわけがない。

ひく♥　ひく♥　とおまんこが締まつてしまふ度に快感が襲う。
我慢しなきや、と思うほどに絶頂感が押し寄せる。

「ふ……ずる剥けのクリ皮引つ張られて舐められるの気持ちいいね？　先つぼびくびくさせながら一生懸命我慢してんの偉い偉い……♥」

「ううう……つ♥　も、むり……つあ！？♥　ああだめ、だめ、せんば、それ、イグからあ……つ

♥」

「だーめ。ほら、我慢、我慢、がーまーん……」

(むり♥　もうむり♥　我慢むり♥　イキそうなクリちゅぽぽぽって吸われちやうのダメ

♡ 腰持ち上がりがつちやうのに、舌離れて いつてくれない♡ ああだめ♡ もういく、いく、
イッちやう……つ♡♡)

「あ、あっ、あッ♡ セんぱ……ごめつ、イッちや、も、イぐ、ううううううううつ♡♡」

びくつ♡ びくびくびくつ！♡

ぶちゅ♡ とろおお……つ♡♡

いつた拍子に何度も収縮を繰り返すおまんこから愛液が溢れてお尻を伝っていく。その間に起き上がった先輩が、力の入らない身体をぎゅっと抱きしめてきて頭の中が多幸感でいっぱいになつた。

「ん……イッちやつたね、白瀬さん。我慢できなかつたんだ」

「はつ、ふあ、あ……？♡ ううつ、ごめんなさい……黒崎先輩にしてもらうの、きもちよ
すぎて……」

「何それ、可愛い……全部許したくなる……。でもだーめ、我慢出来なかつた子にはお仕置
きしないとね」

「へ……っ？ お、おし、おしおき……ひやつ」

ウエットティッシュで口を拭いた先輩に首筋へキスされながら、不穏なことを言われて。お仕置きという響きに慄きながらも、また触れてもらうことを期待してしまって……お腹の下の方がひくん、と疼いた——そのときだつた。

「あれ？ 電気ついてる。おーい、誰かいんの？」

入口の方から靴音と共に——森下先輩の声が、聞こえてきた。